

やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

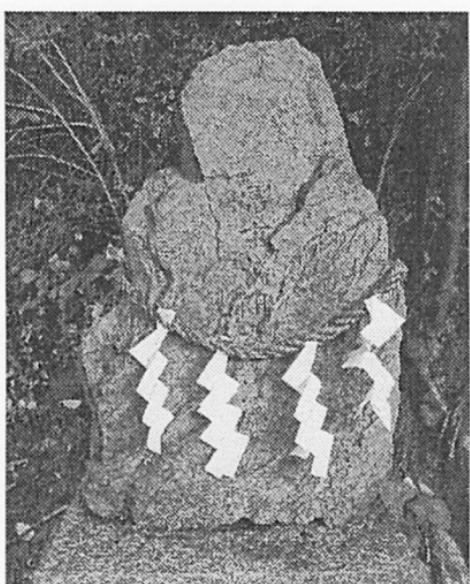
富雄川上流の長弓寺（生駒市上町）は、優美な桧皮葺きの国宝の本堂で知られる。前回紹介した石造役行者像は、本堂の左手の大師堂の南側にある。その反対側、本堂から右手に道を下ると鎮守伊弉諾神社を通じるが、その途中に「富士浅間大菩薩」と刻んだ自然石がある。基礎の石には「観音／嘉右衛門／久右衛門／利兵衛／庄左衛門／五良兵衛／宇兵衛／善七／繁蔵／林蔵／全右衛門／太良左門」と僧俗12人の名が刻まれている。

左脇には1839（天保10）年に奉納された石灯籠もある。この頃には富士山を信仰する講が、こ

の地に生まれていたのだろ。

県内の富士講の事例として早くから知られていたのが旧都祁村（現奈良市）上深川の講で、8月24日に富士垢離を行う。講員は白装束で深川の字カンジョウの淵へ行き、竹の御幣を立てて注連縄を張り、岩の上に神酒と洗米を供え、富士山のある東を向いて、「ひー、ふー、みー、よー、いー、むー、なー、やー」と八まで数えながら、手にした柄杓で川の水を

頭に掛け、「浅間大菩薩」と唱える。これを8回繰り返し、64回水をかぶつて「一垢離」とし、時間



大和に伝わる富士講

に行われ、さらに昔は7日間のお籠もりと水垢離を行ったものだという。こうした富士垢離は、奈良市阪原でも行われている。また奈良市柳生では、上と下の十二人衆が富座行事の一環として、「土用垢離」の名で行う。土は土用の入りの日、下は3日目に、小さな竹の柄杓で川中に築いた石の祭壇に向かって水を8回おいてもう一度水垢離をする。終われば寺で重箱入りの精進料理で会食した。元は8月7～8日

に行われ、さらに昔は7日間のお籠もりと水垢離を行ったものだといふ。良市矢田原には、松明を掲げて行者が富士山を登る富士参詣曼荼羅が伝わる。大和高原ばかりではなく、富士講は盆地部にも広がっていた。奈良町でも元は行われており、行者講が富士講を兼ねる事例も見られる。江戸時代中期以降、富士講は江戸を中心として爆発的に広がり、登拝や富士山を模した「富士塚」を溶岩などで造ることも流行した。遠隔地の山の信仰を大和の人々が受け入れた背景と実態はまだよく分かっていない。

表

（奈良民俗文化研究所代
ニ隔週掲載